

---

# わが家におわす観音サマ

光久

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

わが家におわす観音サマ

### 【著者名】

Z1089D

【作者名】  
光久

### 【あらすじ】

田の前に現れたのは、他ならぬ観音菩薩様だつた！？ある日の夢から始まる橘忍夫の非日常。その世界、とくと御覧あれ。

## 第零書【ハジマコの世界】（前書き）

やや二ヶ月ぶり、光久です。

個人的にいろいろと立て込んでいて、やつと時間が取れるようになりました。

さて、以前の状態を知っている人は「一体どうなってんねん！？」と思つていらでしようが……すみません。此度私は『わが家におわす観音さま』を一から書き換えようということにしました。

理由云々はここで書く理由も無いので割愛させていただきます。はい。

これからは非常にゆっくりとした更新になると想いますが、なにとぞお付き合をお願いします（――）。

## 第零書【ハジマリの世界】

気がつくと、自分は白い海の真ん中にいた。

……綺麗だな。

そんな感慨が湧く。足元で穏やかな波を立たせているそれは四方無限に広がっていて、更に言えば空も純白一色に広がっていた。その偉大な統一性に息を呑み、

懐かしい……？

まるで久しく自分の故郷にたどり着いた旅人のような、不思議な気持ちを抱く。

……いや、こんなことをしている暇は無い。と、軽く自分を叱咤する。

自分は、行かなければならぬのだ。

何故か？と考えて、自分がその答えを持ち合わせていないことに気付いた。遠い昔、理由を知っていたはずだったのだが、今はすっかり忘れているみたいだ。ただそんなことはどうでもいい。むしろ、大切なのは『何処へ』だ。

決まっている。【 】のいる場所へだ。

そう思った矢先だった。

静謐な白の世界が、一瞬歪んだ。

来たか。

世界が鼓動する。これは、新たなる生命の息吹。まだ見ぬ大いなる存在の胎動だ。何故だかわからないが、そう感じた。

間もなく、【 】が生まれる！

急がなければ。と足を動かそうとしたときだった。

！－！

まるで地雷がんじがらでも踏んだかのよつて、急に足元から何本もの鎖が飛び出す。雁字搦めに縛られ、すぐさま身動きが取れなくなる。

まづい、これ…… イテヨウつのお……？」

ついきつて引つ張られたことに悲鳴を上げ、その『自分の生声』に驚いた。

「あああ？」

目から鱗うろこが落ちたよつな……それでいて、頭がこんながらがつたよつな感覺だ。つか、どうして俺はこんな感じにいるんだ？

なんなんだ、ここは？

ズゴン

そんな擬音が相応しい衝撃が、自分の足元に響く。いきなり何だ？  
と思つたが、すぐに理解した。

「おつ、おこ……」

体がどんどん沈んでいく。或いは、水面がどんどん上昇しているのか。真っ白なこの世界じゃどっちがどっちかわかったもんじゃないが、膝下辺りにあつた水面が、今股下にまで上がつてきている事は

確かだ。

このままでは溺れると思つても、体に巻きついた鎖のせいで逃げられない。真っ白な水面はもう肩にまで到達しようとしていた。

「つたつ助け……つ！」

掴む藁も無く、助けの声を呼ぶにも周囲に人の姿は無い。  
……いや、

「おい、あんた！」

いた。

目の前、大体十メートルかそれくらい先に、一人、素つ裸の少女の姿が。格好云々はどうでもいい。もう顔を仰がなければ息ができない状態だからな。

「聞いて……んのか！」

必死に助けを呼ぶ。しかし声は届かないまま、とうとう水位が俺の身長を超えた。体全体がその海に没する。口に入ったその味から、ああ、これ何か牛乳みてえだな。と、もはやどうでもいい事を考え

俺は思つ。

このときの光景、そしてあの少女こそ、これから俺の身に次々と降りかかる『不幸』の原因なんじゃねえのか?と。



## 第一審【変容の兆し 1】（前書き）

あるいは意味でべつたりしてこまく。 orz  
詳しきは後書きにて。

## 第一審【変容の兆し 1】

目の前にあるその存在を目にして思ひ。

とうとう 始まった。

これまでの努力も虚しく散る。もはや逃れられない。あのバカ共の  
茶番からは。

そうなつたらむか……

いや、

決して、そうさせてはならない。  
まだどうにかなるかもしない。まだ取り戻せるかもしない。完  
璧に、路が閉ざされたわけではない。

せつたいあきりめねえ！

遠い昔に言われた言葉を思い出しつつ、顔を上げる。  
そうだ、諦めない。諦めてなるものか。

「あひと、助けるから」

その存在に自分は誓いを立てる。

そり、

……あの時の、代わりに。

## 第一審【変容の兆し 1】

妙に自分の体がふわふわと浮いているような気がした。かといってそこは水の中とは思えない。自分の体は規則正しく揺れてい、体の前面がほのかに暖かかった。

このまま田を覚ましてしまったのが億劫なくらい心地がいい。ゆりかごとは違うが、まるで童心に帰る様な気持ちだった。

何かを忘れている気がする。それは一体何だったか。

心のどこかが訴えるような声に、もう少ししだけと耳を背けてしまつ。

あんな、何処ともわからない真っ白な世界に放り出されたんだ。もう少しぐらぐらいいだろ……？

そり、もう少ししだけ

⋮

もこもこ。

意識がすっかり覚醒したのはその次の瞬間、両手に柔い感触をしたにかに触れた時であつた。

規則正しかった揺れがピタリと止まる。心なしか、体中が酷く汗ばんだ。

……無意味な空白。その間三秒。

そして、良く聞き知つた少女の声が耳に入った。

「…………忍夫？」

「はい…………あ？えつと」

無視していればよかつたものの、何故その問いに答えてしまつたのか。

気付いたときにはもう遅く、「起きていたのね……」と、頭越しに声が聞こえる。

頭の中に言い訳が浮かんでは消える。そういうえば、と今見ていた夢を何故か思い出したり、それよりも、と手の感触がいやに生々しく記憶に残つていて、まともな判断など出来るはずもない。つまるところ、完全無欠にパニック状態だつた。

「忍夫、たちばな忍夫」

自分のフルネームを呼ばれて、情けなくもこの場で逃げ出したくなる。

つらつらと罪状を告げる裁判官よろしく、そのままの体勢で言葉を紡ぐ少女。その状況を、たとえ目を瞑つたままでいながらも間近で感じるのは、はつきり言って心臓に毒だつた。

「『何時から起きてたか』なんて事は気にしない。つまり、私が忍夫を負ふつて運んでいたことには罪は無い。こればっかりは私の責任だから。ただね……」

「た、ただ……？」

「…………何時まで触つてんのよ？」

瞬間、忍夫は自分の尻に痛烈な一撃を食らつた。

＋＋＋

「……朝からずいぶんと鬱屈しているな。何かあつたのか、忍夫？」

何故か感心したような声を聞き、忍夫はぐつたりと机に寝かせていた顔をもち上げる。学校の、己の見慣れた黒板を背景としてそこにはいたのは、首まできつちりと締まっている詰襟服に、常に無表情な丸坊主という、一世代ほど遅れたような格好をした男の顔。

「…………テツか」「見ての通りの日立徹也だ。…………何か不満でも？」

尊大な態度で仁王立ちする存在は見ているだけで腹が立つたが、今は殴る分の労力も惜しい。

再びぐつたりと机に顔を落とす忍夫をひとしきり観察した徹也は、その原因に当りをつけ、それ（・・）のいる席をちらりと覗く。忍夫の近所に住む同級生にして、唯一の女友達はその時、なんでもないような顔で、しかしどこか不穏な空気を醸し出しつつ、読書に耽つていた。

「…………また吉沢絡みか」

「“また”ってなんだ。そのイラつく笑みはなんだ」

ジロリと刺すような視線を徹也は避け、以外だと言わんばかりの口

調で喋りだした。

「ちゅうど一週間前にもいやいやがあつただろう。更に、それを考察すると、何だ忍夫、しつかり青春してるじゃないかと思えてしまつのだよ。彼女の姿も中々故、余計にな」

言い切つた後に笑みを更に深められ、忍夫は溜息で答えた。

勘弁してくれ。

吉沢祥子。  
よしざわしやうこ

彼女は確かに同級生内では上玉の美少女と言つてもいい。艶のある黒髪に、整つた顔立ちには、やはりそう言わしめるだけの魅力がある。そして物腰も落ち着いていて、優しい……という評価には、今朝いきなりアスファルトに落とされ、散々怒鳴られ、説教され、拳句の果てにそっぽ向いて完全無視という洗礼を受けた忍夫には、いささか反論を禁じ得ないが。

ただ、もとより吉沢と忍夫の関係は、そのような甘いものではなく、「家が近い」と言う接点を除けばほぼ赤の他人と言つてもいいというのが忍夫の見解である。

そんなことはともかく、

「それにしても、奇妙だな……」

「どういうわけだ?と尋ねる徹也は一先ず置いておく。

どうして寝てたんだ?」

「さうがあつたその前を思い返してみると、不気味な要素が多い。

最後に記憶に残っていたのは、路上の景色。そこで眠気に襲われたことに始まり、決め手は“あの世界”。何処か神聖で無垢な白の空間。

何だつたのか、あれは。

「……それほど落ち込んでいのなら謝ればいいじゃないか」「おこひり

黙つて考えに耽る姿を見て何を勘違いしたのか、喧嘩別れした生徒を受け持つ先生のように諭した徹也。忍夫としては、あらゆる意味で不愉快である。

「大体なんで俺が悪いって解るんだ」「ではあちらが悪いのか?」「…………そりや…………」

考えるまでも無く、粗相をしでかしてしまった忍夫がほぼ全面的に悪い。

加えて、成り行きとは言え、あちらは忍夫を負ぶつて運んでくれたのだ。

……そこを五歩譲つて、こちらの言い分が無いわけでもないが、

「…わからんな。そもそも今朝何があつたのだ?」

あの出来事を事細かに解説した上で、果たして『寝ぼけてました』はどこまで通じるのか。

返答に詰まつた忍夫は、次の瞬間、例えれば阿修羅のような殺氣を感じた。

具体的には徹也が覗いた方角。左斜め前の二番目の中席。……もつと言えば、吉沢祥子本人から。

「……つー

喋るな。

最も恐れるべきは、忍夫以外の誰も気付かないタイミングでこちらを睨みつけたことだ。

口ほどにと言つて、口以上に的確に物を言つた吉沢の眼力を垣間見て、忍夫は本能から戦慄した。

その吉沢に背を向けた状態でいる徹也もまた気付くはずは無く、ただ何故かビビる忍夫を見てふと後ろを振り返つた。

「……どうしたのだ？」

「あ、いや、何も……それと悪い。ちょっと言えない……かな。理由は

途端に素面で本を読む吉沢に改めて恐怖し、忍夫は固く誓つた。

絶対に、あの事実は隠し通そう。

何か使命めいたものを帶びた忍夫の顔を見て、考え込んだ徹也は、おもむろに口を開いた。

「吉沢に破廉恥でも働いたのか？」

眼力再来。

いや、今のは俺のせいじゃねえだろと内心慌てふためく忍夫を見て、徹也は何處か得心したような、それでいて申し訳無さそうな表情を

する。

「……了解した。これ以上詮索するのは止めておく」

「購買。ジュースとプリン」

「……すまない」

死ぬ前にせめてと慰謝料を提示して、忍夫は泣く泣く、  
二度机に突みたびつ伏した。

## 第一審【変容の兆し 1】（後書き）

前回投稿から日が経っているにもかかわらず、殆ど話が進んでいませんよ。はい。

この後の話もぜんぜん固まつていかない状態。

俺自身も色々立て込んでるし……

单刀直入に、誰か助けて（泣）

……とまあ泣き言はこのくらいにして（オイ  
次回は部活の後輩登場。そしてタイトルのお方が出てきそうな気配  
です……と銘打つて自らを追い詰めつつ。  
あ、もし良かつたら感想とか送つてください。  
では。

## 第一審【変容の兆し 2】（前書き）

6 / 25

中盤、忍夫と徹也の掛け合ひをちと掘り下げてみました。あと後半  
も少し。

大筋は変わんない上にただまさこだけですけど、まあ覗いてやって  
ください。

## 第一審【変容の兆し 2】

「準備は出来たかえ」

「万全です」

「よい……ふふ、まさか妾わいわが人間道に赴く日が来よつとは思つても  
みなかつたのう」

「随分楽しそうで」

「そうかや？まあ致し方あるまい。初めてじやからな。残念なのは  
之が観光ではないところじやの」

「……『かんこ』……ですか？」

「あちこちを見て回つて楽しむことじやよ。いやはや、まつたくも  
つて残念じや」

「そうですか……？」かんのん観音様

「その名前はどうも」と、じつやら開いたようじやの。まあ行く  
ぞ。『衛鬼えいき』よ

「御意に」

### 第一審【変容の兆し 2】

忍夫が住む町、久弥市にはただ一点、特筆すべきことがある。

即ち、寺の数。町一つとしては異常なほどの寺院密度は、聞くところによれば、奈良のそれをも凌ぐと言われている。戦国時代、かの織田信長に迫害された寺院の者たちが、この地に集つて細々と暮していたとかなんとか。ともあれ、特に興味がある人でもない限り、由来云々はどうでもいいことには変わりないわけで。

忍夫が通う県立久弥高等学校。その弓道場に隣接して建立される大きな寺院からは、毎日、放課後辺りに物々しい御声が聞こえて

また。

今日も一部員として最初に道場に足を踏み入れた忍夫は、他に誰もいらないそのひと暇を、写経を聞き流すことで埋めていた。

他に部員には不評だそうだが、忍夫自身としてはそれでもなかなか良いものじゃないかと思う。門前の小僧ではないが、少し位なら言えるかも知れない。根暗みたいな趣味なので誰にも言いはしないけれど。

そんな低調な、そして莊厳な経を聞いていると、

「あ、またですか。喧しそぎて吐き返すり湧きますね」

急に聞こえた独り言に、そこまで言うかと忍夫は思う。

「いやどうか道に集中しなきやならないのに、また飽きずに出でぬ

「よべりまで寺を悪し様に言えぬな龍明寺」

る少女は、苗字の通り、幾つもある寺院の一つ、『龍明寺』の娘である。

「だからつらつ！『龍明寺』って呼ばないでくださいって何回言え  
ばわかるんですかつ！」

そんなことを叫びながらオーバーアクションにすかずかと歩いてく

る龍明寺。眉の傾斜角がみるみる大きくなつてくるのが、忍夫にも良く見えた。

「知るか。お前の“寺嫌い”も聞き飽きたわ」

「馬鹿ですかつ！先輩馬鹿なんですかつ！！」

「『先輩』と敬つておきながら馬鹿馬鹿連呼するのかお前は……いや、取り敢えず、いちいちじたばたしたり叫んだりはやめろ。近所迷惑だから」

或いは自分の家柄に対する、第一次性徴的反抗心だと忍夫は勝手に思つてゐる。彼女が弓道部に入部して以来、周知のものとなつてゐると思われるその“寺嫌い”。もっと端的に“巫女好き”は、いまも、何故か彼を苛んでいた。

「……やつぱり馬鹿です先輩。人がこんなにアピールしてるのに「ガキっぽさをか」

「違いますっ。ほら、何か見違えた氣がしません？」

いまいち龍明寺のテンションに追いつけていない忍夫は、くるりと回るその姿を目に見て、取り敢えず氣付いたことを口に出す。

「……背え伸びた？」

「えつ？ホントですか…ってそうじゃないです！ほりつ！」

龍明寺が言いたいことには、既に気付いていた。歩き方、わめき方というわざとらしいアピール。気付かないわけがない。むしろ、定められている『弓胴着』という範囲を違えたその格好を、どう指摘すればいいか、判断しかねていたのが実情である。

上はまだいい。今日持参したものなのかな、綺麗な白の胴着。問題は、原色そのままの紅色を塗りたくつた袴にあつた。それらを

組み合わせると、成る程。何処か清純なイメージを与える儀式装束に変わる。人によつては興奮してしまつかもしれないその格好。

「ふふふ。やはり萌えますか」

アホかと口を挟む間もなく、少々頭の悪そうな笑みを、更に気持ちの悪い笑みへと変容させる。正直、女の子がしてはいけない類のそれだ。思わず引きつりそうになる顔をうまく隠しながら答える。

「『巫女服』……っぽいな」

「さすが！つてか聞いてくださいよ！下だけで五千円もしたんですよ！」

「……あ～、果てしなくひとつでもいいわ。ついでに言つとくが全く萌えん」

「嘘吐きです先輩！巫女と言えば『梓』！弓道と言えば『弓道』！口レ以上なく巫女と関わりがある』の武道に巫女萌えがいない訳ないじゃないですかっ！！！」

「梓』は知つてますよね？」と続いて理解不能な単語主体の演説が続く。話題が自分の領域になつた途端このはしゃぎ様。この辺り、彼女がどんな心持で入部したのがが伺える。というかとも部の共通認識のように言わないのでほしい。唯でさえ、彼女の大々的『弓道部は巫女萌え』発言で周囲から孤立気味となつてゐるのに。

勘弁してくれ。

本日一度田のその台詞は、一度田のそれよりも疲労の溜まつたものになつた。

呆然と受け答えしていく尚、弱つていいくのが自覚できる。ただでさえ、吉沢との朝の不幸。或いはしつべ返しを引きずつてゐる忍夫に

とつて、今の状況は、さしづめ泣き面に蜂の大群だった。

しかし、苦痛は長くは続かない。入り口から他の部員らしき足音が聞こえてきて、龍明寺の巫女談義はひとまずお開きとなつた。やれやれ、と開放感に浸り、更衣室へと足を伸ばした。

そんな時、

「……氣を付けて下さいね」

直後に放たれた、対象不明の忠告に、忍夫は顔をしかめた。ふと、朝の夢が頭に去来したが、

いや、深く考えすぎだろ。

たぶん挨拶の類だと考へを改めて、なおざりに手を振つて返した。

十 十 十

通学路に五つも寺院が建つてゐるのは、世界広いといえば、そういうは無い。一年の高校生活を過ごしてきた忍夫は、今日もそんな他愛もないことを考へながら下校していく。

青から赤へのグラデーションが空に展開し始めた頃合い。西口に差された閑散と道路の右手には、小さな空き地と共に、『觀照寺』と言つ名前の石碑、そして申し訳程度の仏壇がある。通学路にほぼ等間隔で建てられた中の、学校側から一一番田の寺。徒步通学の忍夫は、その側を横目で通り過ぎた。

「……ビーしょつかな……」

「どうした？」

そう言つて頭を抱えると、今まで失念していた声が、左から聞こえた。

「……なんだテツか

「校門からずっと居た友人を『なんだ』とは酷いな」

「いや、お前つてデジタル的には誰よりも存在感があるくせに、元気つけないと気がつけばいるみたいな所があるからなあ」

「……所々の棘のある発言には、この際目をつぶらせて貰おう」

「そりや助かる」

学区の関係で中学校からの知り合いだが、忍夫と徹也の家は程々近い。お互い部活の身であることもあって、時間が合えば一人で帰つたりする。今日も偶然、校門でばったり会つたことを、忍夫は今更ながらに思い出した。

そんな徹也は、場を仕切りなおす意味を込めて咳払いをする。彼の癖であるその仕草に、忍夫はいやな顔を隠さずに表した。

「では、今しがたの発言について問うて詰めさせてもらおうか

「めんどこ」

「そう言つた。いや、どうが俺の姿勢は変わらないな……わかるだろ? わあ観念しろ」

ただ悩みを打ち明けるかどうかという話なのに、なんで『観念しろ』なんて台詞が出てくるのか。

「……わかったよ」

正直、作りたくない。そう考へて居るのは、今夜の晩飯についてだ

つた。

責任は、不定期な仕事に就いている母親にある……と忍夫は密かに思つてゐる。

「色々あつてな。週に数回、自炊しなければならないんだよ」

本人としてはずいぶん億劫なものだった。母親の、「作らなきゃシメる」の勅令さえなければ、たとえ晩飯を抜くことになつても作らないだらう。

「いやまあ、材料は残つてゐるか」とか、今日は何を作らうかなど。んな前向きな事も考へてはいるんだけどさ……」

それでも、たかが自分の為にと、面倒臭く思つてしまつのも仕方のない事ではないか。

……そんな考えをする自分はきっと、間違つてゐるのだろうが。そつ自分の中で結論づけていふと、徹也は、

「ふむ……つまり、楽しくないわけだな。料理が

そんな事を聞いてきた。思わず虚を突かれて、皿を丸くしてしまつ。

「楽しい……？ なんで」

「俺も、家の事情で偶に自炊することもあるが、やつてて思ひのほか楽しいと思うのだがな。どうすれば効率良く出来るか、どういう切り方をすれば食材の旨味が出るのか、とな他には」

さすがにそこまでいくわけが無いと思つてゐる忍夫だが、どうにも、旗色が悪そうだった。

「そんなもんか？」

「『道は楽しくないのか？』」

「え？ 特に」

「違うな。 そんなもんじゃない」

段々徹也が熱くなっている気がする。飛び飛びの話題に翻弄されそうだ。

「お前を見ているとただ日常を淡々と過ごしてこられるよしが思えなくてな」

「…………」

そう思わないでもない。忍夫はそんな顔をする。しかし、

「中高闇わらす、一年生は中だるみ。誰だつて同じじやねえか」

「だから、」

「お前は違うかもしねないわ。テストでは順位一桁。部活の剣道では期待のホープ。まったくすげえやつだよお前」

そんなつもりでもないのに、自然を声を荒げてしまつ。或いは、溜まつてこる何かを吐き出すように。

「でもそんなあんただからそういう思つちあるんじやねえの？それに引き換え…なんて言われそうだな。全」

「忍夫」

それ以上の独白を徹夜は手で制す。その眼差しは、愁いを帯びていた。

「もしかしたら俺が言い過ぎたのかもしれないな。謝る。ただ、言

いたかつたのはそんなことではない。……高校生らしくないのだ。  
いつからだつたかお前は心に、」

そこで言葉を切ると決まりが悪そうな顔をした。

遠くで子供の笑い声が聞こえる。心に?と聞き返そうとしたといひ

で、

「いや、すまない。やはつ今は忘れてくれ」

「……こつちも悪かつた。ビリにも頭がぼーっとして」

そうか、と小さく呟いて、そもそもと自分の家の方角へと向かう徹也。忍夫は少し遠く瀬無く、その背中を見る。肩越しからは……

「ふふ、やはり忍夫。吉沢と仲直りしろよ」  
「なつー。」

爆弾を投げつけられた気がした。

「その諸症状はきっと吉沢が原因だらつた。やはりお前らは」

「いっぺん殴らせろこのくそばか」

「それじゃ、仲直りしてからやるんだな。やつ簡単にはやらせないが」

余計なお世話だと毒づきながら坊主頭を忍夫は見送った。それから徹也が路地の角を曲がり、完全に見えなくなつたところで、心なし緩んでしまつてゐる頭を拳骨で小突きながら、再び帰路につく。

「楽しい、ねえ」

それほど時間が経つていないと思つたが、空は既に星の瞬きを映し始めている。

思つた事があつただろうか。時々作る料理に。或いは、日常に。二番田。『面徳寺』の門を過ぎても、思い浮かぶ事はなかつた。

「そんなこと……どうでも……？」

異変を感じたのはその時だつた。

「……なんだ？」

ざつと周囲を見渡す。真つ赤に染まつた光景には、特に不思議なとこりは何もない。

いや、

「……っ！」

異変は、足下からだつた。

何故かは全く見当が付かない。アスファルトが、まるで蜃氣楼がかかつたように、歪んだ。まずい。

本能で悟つた忍夫は、慌ててその場から離れた。変化は続く。歪んだ地面は、やがて黒い穴となる。氣味の悪い空氣がそこから漏れ出でているよつた気がした。

「お、おこない……誰の悪戯だよ！」

冗談交じりのその声も、震えが入つてうまく言えない。そして次の瞬間、

黒い穴から手が這い出でてきた。

「うう……！」

次に頭が。  
そして顔が。  
肩が。  
身体が。  
足が。

化け物だ。

その全貌を見るや否や、忍夫は反転する。  
逃げようと思つた。アレはまずい。この状態じゃどうしようもない。  
しかし、もう遅かつた。

「んなう！」

同じような穴が、忍夫を挟んで十以上。そのどれもから、今見たよう  
うな腕が飛び出し始めている。

逃げ場は。

「……っくわっ！」

忍夫は『面徳寺』に向かつて走り出す。もはやそこには、道はな  
かつた。

門をくぐつて、忍夫は本堂の裏へと逃げ込んだ。どこかに繋がつて  
いるかも知れない。と思ったが、出入り口の門以外は、全て壁に囲  
まれていた。幸か不幸か、忍夫以外の人間は一人も居ない。

一縷の望みをかけ、角から門を向う。そして後悔した。

龍明寺よりも小さい、幼稚園児のような背。ただ、体中が痩せ細り、目をギラつかせ、腐ったような唇からは牙が見え隠れして、枯れきった喉から出たような呻き声を上げる。そんな化け物が、見えるだけでも二十体以上。全員が、忍夫の逃げ込んだ面徳寺に入ろうとしていた。

間違いなく、自分を狙つてゐる。そう悟つた。

「なんなんだ……」

なんなんだあれば！

そう叫びたい気持ちを抑え、必死に身を隠す。

草を搔き分ける足音が段々と近づいてくる。嫌な汗が止まらない。鼓動が痛い程に響いてきた。

走馬灯。これがそう呼ぶのかもしない。ただ、目を瞑つたその先に見えたのは、高校の、それどころか中学の頃の自分でもなく、今朝見たあの夢だった。

白い空、白い海、その先に見えた素つ裸の少女、そして鎖に絡めとられ沈み行く自分。

どうしてそんな景色が、今

「『如来』」

突如、少女の声と共に風が舞う。舞う中で、あの化け物の枯れた叫び声。或いはそれは、悲鳴を思わせた。

「 」 ひりひり出てきた途端遭遇とは、何とも蓋ふる「ことじや」の「

暫く、その声に何の反応も返す事が出来なかつた。

「しかし『餓鬼』に襲われるとは難儀じやな人間……ぬ、どうやら標的を委に変えたようじや。どれ、一つ相手をしてやらぬか……衛え鬼よ」

「御意に」

再び、化け物達の悲鳴。思わず本堂から門を覗く。そこには、一匹、また一匹と蹴散らされているあの化け物と、白髪の 恐らく自分と同じくらいの背格好をした青年の人影。

「御主、何時まで隠れていのつもりじや」

そしてもう一人、手前の人影は、ゆっくり忍夫に振り返る。  
そこには、

「……はい?」

「……なんじや その顔は」

良くて十四程。背ほどの黒髪を棚引かせ、袈裟けさをその身にまとつた少女が佇んでいた。

## 第一審【変容の兆し 2】（後書き）

無い頭しばつてようやく生み出した第一審。ええ、存分に叩いちやつて結構ですよ？未だに一人称なのか三人称なのかわからんないとか。自分でも悩んでるんですから。ハイ。

つてのはまた今度にして、

コレでやっと軌道に乗り始めました。タイトルの娘も出てきました。話を考える側もコレで一安心つてな訳でして。いやいや此処まで一體何ヶ月かかったんだって思うと、ね。

甘口辛口関わらず、批評は私の滋養となります。鯉に餌をやる気持ちで、どうぞ書いてやってください。では。

## 第三審【崩れる認識 1】

ただ、息を呑む事しかできない。  
化け物が出てきて、そして襲われた。

今まで感じた事のない、本当の恐怖感を知った。  
そして、そんな状況から自分を救つたのは、まるで鬼のよつた霧囲  
気を持つた白髪の青年と、年端もいかない しかしただ者とは思  
えない、袈裟をまつた少女。

非現実的。己の認識に修復不可能な輝ひびを入れたその光景。  
それを目の当たりにして、ふと、忍夫は思った。  
龍明寺が呟いた、単なる挨拶だったはずの、

『……氣を付けてくださいね』

あの言葉は、今このれを予知しての物だったのではないかと。

### 第三審【崩れる認識 1】

「衛鬼」

呼びかけられた白髪の青年は、襲いかかってくる化け物を小太刀で  
切り裂きつつ、周囲をざつと見回した。

足下で倒れ、そして直ぐに霧散した化け物。今居るその場所は、悠  
然と立っている少女と、本堂に隠れている忍夫。一人と、化け物の  
間。

「【餓鬼】が三十三体。奥の【澁み】の規模から鑑みても、十分対

応できる数です

まるで、少女の意志を汲み取ったように淡々と報告して、

「殲滅も可能ですが？」

一人に飛びかかるうとする化け物を一閃にて断ち切り、そう尋ねた。

「よい。耐えるだけに留めよ」

それに少女は、古めかしい言葉を使いながら、自身を顕にするような笑みを浮かべて命令する。

「……少々、考えがある 補助は要らぬな？」

「不要です」

「阿呆。そういう時は『大丈夫です』と言つのが常じや」

「……、大丈夫です」

ちらりと青年は後ろを振り向く。頬を膨らませるというなんとも稚拙な表現で怒るその顔を見て 何故か脂汗を流しながら それ以上何も聞かず、衛鬼は化け物の群れへの対応に専念し始めた。斬つてはその化け物を消滅させ、どうあっても一定のラインを超えないように。

そこまで見た少女もまた、振り返る。そこに居たほうの男は、どうにか本堂から出てきたものの、それつきり動かない。

怯えている。そう認識した少女から見れば、男は随分と普通の青年だった。地味な服装（とは言つても制服である）。特徴が見受けられず、目を離せば一時間としないうちに忘れ去られてしまいそうな顔。ついでにこの体たらく。故にその存在、どれだけの価値も無いはずなのに。

ざつして。そんな風に一瞬顔をしかめ、そして、

「セヒ とおりー」

「ほげつー」

「地蔵もあるまいに、呆けていても邪魔だなけの間抜けめが。菩薩面を貸す。そのまま去ぬが良い」

遠慮とかそういう感情を一切排除した、辛辣千万な言葉を、鋭い蹴りと共に放つた。

何だおまえは！？

向こう脛という弱点を突かれてその場に蹲つた忍夫は、呻きながらそう言いたかったのだろう。恐怖故か、声が出ずには口しか動いていない。

どうにか忍夫は顔だけでも上げる。視界の端で青年が化け物相手に大立ち回りしている。その少女は、やはり中学生一年生ぐらいの背格好をしていた。背中にまで伸びた、漆のような黒髪。明後日の方向を眺めている田もまた、綺麗な黒だ。彼女が纏っている服装も黒。或いは喪服かと思つてしまつけれど、それにしては静かな雰囲気が無い。むしろ『支配色』。あらゆる物をひれ伏せさせる黒。そんな少女は、自らの袖をまさぐつていて。

「…………？」

警戒する忍夫。しかし始めこそ蹴られたものの、今現在も敵意はない。そう思った忍夫は、助かったのか？と少し気を緩める。さて、忍夫の仕草に完全無視という態度を見せていた少女は、『これで…』と『などと呴いて、袖口から一枚の面を取り出した。

「お、おまえら一体」

「寂靜」

忍が話しかけたのに無視。とかく、少女がその面に手をかざし、そう唱えた。

清浄さを思わせる音と共に、面は蒼く光る。まるで魔法を見ているようだ。

「なつ、なんだそれ！？」

「これで良いじゃろ。ほれ。それをしつかり持つてあるがよい」

「え、あつ……と。これで何を

「

「くれぐれも落とさぬようにな。死ぬぞ」

やはり無視。そんな事を言いながら面を放り投げられ、忍夫はおつかなびつくり受け取った後、耳に入った言葉に戦慄した。

そして目線を落とす。

：その面は、いわゆる『仏様』の御尊顔とでも言つべきか。中学校の修学旅行が脳裏に過ぎる。その時圧倒的な大きさを誇つていた顔が今、生々しいまでに手元で表現されていた。

「キモ」

一瞬恐怖を忘れて顔を歪めてしまつぽどのインパクトである。御利益ぐらいは享受できそうではあるが。

「……じゃなくて、お前らは一体誰

「衛鬼！」

どこまでも忍夫を無視しまくって、用意は着々と進む。少しじけてやりたい衝動に駆られた。

「邪魔だ」

青年は、最後に一閃、周囲の化け物を軒並み薙ぎ払つてから、少女の元に走り寄つた。

そして、ひざまづ跪く青年。そして、仁王立ちする少女。さながら姫君と守衛の騎士である。

「…つか話を聞け」

「こやつを逃がす。塀の向こうへ放り投げよ」

そんな姫君は、とことん自分を無視して最後に淡々としきり命じた。

「……は？」

いよいよ落ち込もうと思つて、それから彼女の言葉を理解する。

唖然呆然。或いは思考のフリーズ状態。

「御意に」

「御意に？つて違つ！今何つた！？放り投げ？ちょつ、やめ…  
ぬわあああああ」

返事をする青年。戸惑う忍夫。逃げた方が得策と氣付いたのも遅く、襟首を掴まれた感触。次の瞬間、自分を無視した少女、白髪の青年、そして化け物。全てが逆さに映つていた。

要するに、忍夫は宣言どおりに投げ飛ばされていたわけで。前後のみならず、上下左右までもが不覚。五感が麻痺しかける一、七秒の滞空時間の後、山なりに飛んでいった忍夫は化け物と出遭つたアスファルトに着地した。

ああああああぐをつ！だつ！がへつ！

否、激突した

当然の事ながら、スタント経験なぞ皆無。ましてやワイヤー無しのガチンコアクションに忍夫が対応できるはずはない。結局、一回三回と地面に叩き付けられた忍夫がようやく止まつたときには、満身創痍な状態でアスファルトに伏せつていた。

死んだ俺死んだ完膚無きまで俺死んだっ！死んだ  
か何だあいつ！？いきなり投げるか普通？しかも頭からブツブツブ  
ツ……

ただただ、情けない姿である。

溺死でありながら、何やら吸詠のようは吸いでいる。その近くにはいた化け物が、忍夫に向かつておもむろに爪を振り上げる。

「くつそ』矢さえありや 遠距離からあいつら射抜いてうわあああああつつつ！」

振り向き、そこに認識して  
しかし遅い。

声帯しかまともに機能しない逃げる事もままならなかつた忍夫は恐怖に目を閉じ、その爪を一身に受け

..... ?

ない。

「何をオロオロしておるー」とつと跳散らして逃げんかこの間抜け

! !

無茶言つな。

無事にそつ思えた事に疑問を持つて恐る恐る田を見開くと、そこには、まるで透明な何かに乗りかかっているような、何とも言い難い格好をした化け物の姿が。

「…………は？」

あんぐりと口を開けたまま声帯を震わす。ただ、ぐずぐずしている暇はない。

気が付けば、忍夫は一人、化け物の群れの真ん中にいた。いわば隠れる前に逆戻り。いや、逃げ道や怪我のことを考えれば、寧ろそれ以下の状況ではないか。

「う、うわああああ！」

「一々叫ぶでない耳障りな…………その【菩薩面】を持つ限り、餓鬼共は御主に触れられぬから早く逃げろと言つておるー！」

『逃げる』と言われて逃げられるような状況ではない。既に頭の中がパニックに陥っている忍夫にとって、少女の言葉は、忍夫が見る“化け物の群”という光景に書き消されていた。

それを知つてか知らずか、少女は舌を打つ。こうなれば、忍夫の頭に訴える方法は一つである。

それは、

「……いい加減にせぬと、今度は三途の川の向こうにまで投げ飛ばさせてやるつだーー！」

少女の叫びに、一瞬だけ、化け物までもが静まる。それはまた、忍

夫に、確かに届くだけの力があった。  
すばりは脅迫。三途の川。

「よし、行け衛」

「来んなああああああああああ」

つこわつきまで瀕死だつたのに、いやだからこそ、忍夫は化け物を蹴散らしながら、走り去つていった。

まさに火事場の何とやら。人間その気になれば、である。

「ふん、やれば出来るではないか、あ奴め」

そんな断末魔を壙越しに聞き届けた少女は何かを含めた黒い笑みで頷いた。

すなわち『第一段階終了』、と。

「觀音様」

「だからその呼び方は……と、」

「……ああ、未だ此奴らが残つておつたの」  
衛鬼が忍夫に構つていたところからだろう。今や五十を超える化け物

物 【餓鬼】<sup>がき</sup> が、一人を取り囲んでいた。

「……ああ、未だ此奴らが残つておつたの」  
「六十一体……【瀬み】<sup>がき</sup> が広がつてゐる?」

少女は呆れ、衛鬼は異常な事態に首を傾げる。未だ純粋、或いは無知な従者に向かつて、少女は口を開く。

「稀にあるのじやよ。幾つかの要因が重なり、瀬みを広げるという

…な

そして低く小さく呟く。

面倒にならねばよいが、  
聞き取れず首を傾げた衛鬼をよそに、しかし直ぐに調子を元に戻す  
と、

「まあ今はどうでもよい」

少女は仮面を構え、衛鬼もそれに応じて小太刀を逆手に持つ。一人  
が放つただならぬ殺気に、攻撃の意志として殺氣を返す餓鬼達。  
二対六十一。言つまでもなく、数においては圧倒的に不利な状況。  
それでも、

「衛鬼、瞬殺して奴を追うぞ」

「『奴』……とは、」

「勿論、」

群れが一斉に一人に飛びかかってさえ、

「あの間抜け、じゃよ」

小さな少女は、微笑みを決して崩さなかつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1089d/>

---

わが家におわす観音サマ

2010年10月20日19時54分発行